あなたは無実だった

一色次郎

朝日新聞社

父よ、あなたは無実だった
一色次郎著
一九八二年十月三〇日第一刷発行

発行者　初山有恒
発行所　朝日新聞社
東京都中央区築地五丁目三番二号
郵便番号104　電話〇三(545)〇一三一(代表)
振替東京〇一七三〇
〔編集〕図書編集室　〔販売〕出版販売部
印刷所　図書印刷株式会社
定　価　一、二〇〇円

© 1982 Jiroo Isshiki
Printed in Japan
0095-255033-0042

目次

父はなぜ獄に下ったか　5
1916.5～37.4

沖永良部の現場へ　33
1937.4～63.4

島からの声　95
1963.4～64.6

ふたたび現場へ　131
1964.7～69.10

罪を負うのは誰か　173
1974.3～81.12

裝丁　多田進

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

父よ、あなたは無実だった

父はなぜ獄に下ったか

1916.5〜37.4

私の記憶は、三歳からはじまる。三歳は、父が死んだ年である。その年の記憶は、みんな、八合事件につながっていく。最初の記憶は病室である。私に、そのことを思い出させたのは、スエの言葉である。義理の祖母スエについては、あとで書く。

「元翠の枕もとに、金時計が下っとった。お前が、しつこく、ほしがるとたい。元翠が、おれが死んでから取れ、とおこったたい。お前が、わーっ、と泣いたたい。おぼえとらんかい」

元翠は、父の名前である。鹿児島刑務所から、出て来たばかりであった。私が、この話を聞いたのは、小学生の時である。病室は、よく、おぼえている。狭い、薄暗い部屋である。穢くておそろしかったのだろう。時計は、記憶になかったが、スエの話でみたような気がして来たのかも知れない。それから、ほかに気になり出したことがある。金時計は、直径四、五センチもありそうな懐中時計である。ながい鎖がついている。これも、金である。和服なら、その鎖を帯に巻きつけて使う。洋服なら、上着の襟穴に鎖をかけ、時計は、チョッキの胸ポケットに入れる。当時のチョッキは、そのためにポケットが、四つついていた。和服の場合にしろ、洋服にしろたいへん目立つもので、貧乏人には目ざわりな品物であった。父の持ち物ではなかったはずである。その金時計を私がほしがる。たいていの病人は、壁に頭をむけて寝かされているものである。金時計がベッドの枕もとにあって、私がそれをほしがったということは、病人が入口に頭をむけていたことになる。だから、父の顔がぜんぜん思い出せない。みていないのである。父の病気が結核

であったことも、スエの話でわかったから、見舞人に息がかからないように反対に向けてあったのだとずっとあとになってから理解出来た。病室が穢いのにも理由があった。隔離病棟であった。鹿児島市山下町の県立病院には、そのような病舎があったのだ。むろん、三歳のとき、いきなりこれだけのことが理解出来たわけではない。記憶にあったのは、薄暗い病室だけである。そして、心の片すみにあった疑問は、父の顔がみえなかったことである。そのようなことを突きつめて考えていくうちに、病名がわかって、はじめて不審がとけた。結核も最近の言い方であって、当時は肺病である。うしろ指を差されるいまわしい病気であった。不治の病いとされ、貧乏人がこの病気にかかるとまず助かった者はいなかったと言ってもよい。そんな病気であった。

二番目の記憶は、鹿児島市新屋敷町の借家である。この家は、平家の一戸建で、敷地が広かった。部屋が、いくつにも区切られていた。

明るい真昼である。庭先がまぶしく光っていた。カンナの花が、横にひろがって一面に咲いていた。

表座敷に女が二人いた。着替えをしている。これから出掛けようとしている。一人は母である。立って、帯を締めようとしている。幅の広い帯である。私が、その帯の先にじゃれている。取って寝ころがって自分の体に巻きつける。母は、引いてほかへなげる。帯がのたうつ。また、私がとびつく。切迫した空気があった。その時、庭先へ一人の男がはいって来た。俥夫である。人を乗せて走る人力車を引く男である。若くなかったように思う。ひとめでわかるようすをしている。紺のもも引きに地下足袋をはいている。胸には腹掛丼をあてている。もひとつ、かぶりものが変っている。紺木綿をかぶせた菅笠をかぶっている。そのようなようすで、縁先まぢかの庭に立っ

ている。両足をひろげ、両手に握りこぶしをかためている。何か、叫んだ。私は、その言葉をおぼえている。亡くなられましたぞ、と土地の方言で知らせている。父が、死んだのであった。俥夫は、誰か乗せて来たのではなくて、身ひとつで、そのことを知らせに来たのであった。病院の使いであった。母が、泣きくずれた。母といっしょにいたのは、父の妹のイセだと思う。ほかにも、誰かいたかも知れない。それから、病室に誰か付添っていただろう。いなかったはずはない。誰であったか想像がつかないこともないが、スエでなかったことだけはたしかである。これは、断言出来る。

私は、鹿児島県奄美諸島の沖永良部島の出身である。正しくは、鹿児島県大島郡知名町余多という。島は、和泊町、知名町、二つの町に分れている。以前は、和泊村、知名村であった。それぞれ、更に、いくつかの小字がある。余多は、その一つである。島に対して私は、その位のことしか知らなかった。

自分の家族に対しても、私が知っていることはいくらもなかった。父の命日は、一九一九（大正八）年四月二十六日である。年齢は、二十二歳。戦前は、数え年だから二十三歳というが、この手記ではいまのきまりに従って全部満年齢で書く。そのほうが、比較しやすいと思う。

母は、私が、小学校五年生か六年生の時に亡くなった。命日も年齢もおぼえていない。母の名前もぼんやりしている。ムメ、ウメ、ツル。いくつもあった。どれかが本名で、ほかは通称のようである。父より年上であったらしい。父や母の、生まれた日も知らない。自分の誕生日は、一九一六年五月一日である。私に、兄弟はいない。自分の身内に対して、私にわかっていることは、これだけである。私の本名は、大屋典一。名前の読み方は、「すけかつ」であるが、「助さん、格

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

さん」とからかわれるので、「てんいち」で通している。

どうして、こういう無残なことになったか、説明しなければならない。

私は、島で生まれた。一人っ子である。私が、生まれるとすぐ八合事件がおこった。そして、大屋家は島を引き払った。鹿児島市へ移住した。父は、刑務所にはいる。出て来て県病院で死んだ。以上の事実は、疑う必要のない確かなことである。

そのほかに、少年時代の私が、みたり聞いたりしてわかったことがある。

私の祖父は、大屋次郎という名前である。祖母は、カネ。どちらも、島の人間である。曽祖母イセマツは、本当の名前は石松らしかったが、言いにくいので、イセマツと呼ぶ人が多かった。私は、イセマツばあさんである。これから先この手記の中に、父方の、という言い方はおかしいが本家の祖母カネ、分家の義祖母スエ、母方の祖母と、何人もおばあさんが出てくる。イセマツは、曽祖母だから、「ひいおばあさん」と呼ばなければならないのであるが、いっしょに暮らしていたころの習慣に従って「おばあさん」、それではほかの三人とまぎらわしいから、イセマツばあさんで通すことにする。そのイセマツばあさんの夫はわからない。名前がはっきりしない。鹿児島から来る船乗りの情人であったという。現地妻である。イセマツばあさんは、船乗りとの間に二人の子供を産んだ。祖父次郎がその一人である。ほかに娘が一人いる。

祖父次郎に、三人の子供がある。長男は、私の父元翠である。その下に、イセ、ミツ、二人の妹がいる。私の叔母である。イセは、早く死んだ。ミツは、知っている。

元翠が生まれたあとだとおもうが、祖父は島をはなれた。島には、義務教育の小学校とその上の高等小学校がある。祖父が、高等小学校を卒業したのかどうか、これもわからない。島の人は、

関西や北九州へよく出稼ぎに行く。造船所、鉄工所、紡績工場等の働き口がある。

祖父次郎は、島に家族をのこして、長崎市へ行った。たいした学歴もないのに、職工にならないで、巡査になった。そして、女をつくった。それが、スエである。飲み屋の女で、三味線が上手である。祖父は、島と長崎市を行ったり来たりした。スエに三人の子供が出来た。静子、健男、輝男である。私たち本家の立場から言えば、妾の子である。

祖父は、本家、分家あわせて、六人の子供を生んだ。元翠、イセ、ミツ。静子、健男、輝男。この中で元翠が最年長であることは確かである。あとは入りまじっている。

祖父は、巡査をやめた。それからあとはめちゃくちゃである。長崎で、船員や人夫の口入れ屋をしていた。ボースンというらしい。沖泊りの船に、人夫をくばってまわるポンポン蒸気船を一艘買った。ともかく、そこまではやりとげたのであったが、その小船を台風で失ってから、運が悪くなる。今度は、こともあろうにインドへ渡ってひと旗あげようと考えた。実際に一人で船に乗ってインドへ行ったが、町のようすをみただけで、おなじ船で戻って来た。そのあと、スエとその子だけを連れて、今度は大分県の別府へ行く。ここで養鶏業をしていたそうだが、大雨の鉄砲水に鶏舎を流されてこれも失敗した。

祖父は、鹿児島市へ来た。今度は食堂である。第七高等学校造士館の校内食堂の経営である。私が、知っているのはこの時代からである。校内食堂に住んでいるのは、スエとその子供たちである。

戦前、国立のナンバースクールというのがあった。東京の一高から名古屋の八高までの八校である。いずれも有名であった。ことに鹿児島市は人口がすくない。当時は人口十万人をちょっと

こえる程度の小さな城下町であるから、七高は鹿児島市の最高学府であった。その校内食堂の経営権をにぎる。これは普通で出来ることとは思えない。殊に大屋家は島人である。鹿児島市で島の人間は軽蔑された。島人、あるいは、ジキ人と言われて乞食と同列におかれた。ジキ人は琉球人の略である。奄美諸島は、琉球文化圏である。昔の城下町の士族のいばりかたは、だいたい、どこもおなじようなものであったろう。その大屋次郎が七高に関係した。これは普通のこととは言えない。

八合事件のあと、祖父次郎は、本家の私たちを鹿児島市へ移した。新屋敷町に住まわせる。父は、刑務所である。曽祖母イセマツ、祖母カネ、母、イセ、ミツ、女が五人いる。子供は私一人である。祖父は、近くにもう一軒借りて、大島紬のハタオリ工場をはじめた。土地柄、女にもっとも適当した仕事である。娘三人持てば蔵が立つといわれた大島紬の全盛期である。よその工場へ働きに出すのでなく、自分の屋敷で織らせるのである。糸は仕入れるのだろうけれど、よほどの収入になったらしい。娘三人持てば蔵が倒れるといわれる現在とは逆である。曽祖母や祖母には出来ないにしても、実際に織り手に使える女が本家には三人いる。一つ稼いでやりましょう。祖父が考えそうなことであった。祖父の目には本家を維持することなど、なんでもないことにおもわれていたにちがいない。

本家が、新屋敷町に住んでいる時に、父が死んだ。この時のことが、あと一つ二つ記憶に残っている。奥に寝たっきりの病人があった。祖母カネである。枕元に、ブドー酒のビンがおいてあった。肺病の病人とブドー酒とどのような関係があるのか知らないが、利目(ききめ)が期待出来るようなものではあるまい。病人のわずかなぐさめであったろう。赤ブドー酒であった。赤いから子供

の私の注意を引いたのである。白ブドー酒だったら、水にしかみえなかったろう。赤い無気味な色をして甘いから私がのみに行く。祖母が、枕から顔をあげる。びっくりして逃げる。も一つ。屋敷を抜け出して、母のいる工場へ一人で歩いて行く。工場は、清滝川というドブ川のふちであった。むろん、屋敷と工場は、それほどはなれていない。母には私が来ることがわかっている。だから、前かけか、割烹着のポケットに、森永キャラメルの黄色い小箱を入れていた。天使のマークがあって、赤い帯で封をしてある。今の形とほとんどおなじである。仕事の邪魔になるので、キャラメルを持たせてすぐに帰す。

その次の記憶は島である。母は、私を連れて、黒貫の実家へ戻った。島では、住居にいちいち屋号をつけて、屋敷と呼ぶ。母の実家は、メエマスの屋敷である。母の家族が、三人住んでいた。私から言って、祖父、祖母、それに母の兄である。祖父は、ずんぐり太った、ダルマみたいな体つきの人であった。大きなおなかを出して、ニコニコしている。頭も、おなじようにツルツルしていた。笑うとちょっと歯ぐきが出たように思う。たんに体つきを言うならば、私は、自分はこの祖父に似ていると思う。それから、ついでに書くならば、私は、父よりも母によく似た顔である。祖母は、どういうわけか、そのときは印象にのこっていない。母の兄は、青ざめた顔をした人であった。着物を着て、何もしないでいつも家にいた。

この時のことで、一つ鮮かな記憶がある。ほかの屋敷でのことである。沖永良部島は、東の海岸線に村落が発達している。和泊、小米、二つの船着場の間に、和泊港がわから皆川、古里、私が生まれた余多、母の実家のある黒貫等の村々がある。正確には小字であるが、わかりやすいから村としておく。その皆川村に親類があった。庭に芭蕉が生えている。庭は白く光っている。私

は、その屋敷の屋内にいる。不意に母が入って来た。来るなり、立ったまま、なりふりかまわず帯を解きはじめた。むろん、暑かったのである。それだけの記憶である。あとでこんなことがわかった。哲夫という子供が皆川にいた。黒貫村へ来た。私とおなじ位の年である。誰かに連れられて来たのだろう。私は、その子について皆川村へ黙って行ってしまった。母が、心配して探しに来た。黒貫、皆川村はかなりの距離がある。母は、途中ですれちがった人から、子供が二人で歩いて行くのをみた、と教えられた。この話は、多分あとで母の口から聞いたものであろう。母と島へ帰った幼時の、母に関する記憶は、この一つである。このときの私の年齢は、父が死んでから一年かそこらの時期であったと思う。新屋敷町につくった大島紬の工場は、一九一八（大正七）年におわった、第一次大戦後の不況のあおりでつぶれている。

母の兄について、記憶が一つある。この人は、顎の張った青白い顔をしていた。母に似ていたと思う。野良へ出ない。百姓仕事をしたことがないかのようだ。着物を着て、ぶらぶらしている。ときおり、机に向っていたが、べつに何をするでもない。ぼんやりしていた。いま、この手記をここまで書きすすめながら、気がついたことが一つある。島の農家で机があればめずらしいほうである。それも引き出しのない経机であった。どういういわれの品物であろう。そしてこの伯父は、どういう経歴の人だろう。いまとなってはわかりようもないことを、私は、ふっと思ってみるのであるが、あるとき、この人が私に絵を書かせた。私に、クレヨンと画用紙を買ってくれたものと思う。船着場へ行けば、その程度の店はある。私は船を書いた。しばらくすると、その人は机の横へもどって来たが、私の船をみるなり、煙はうしろへ行くものじゃ、と言った。煙突の煙が、前へ流れていたのである。ところが、私は承知しない。口答えした。いや、前に流れてお

った、と言った。その人は、うしろへ流れていくもんじゃ、と言った。私も、も一度、前じゃ、と言った。その人、と言っても、私からは伯父にあたるのであるが、それで黙ってしまった。私は、島へ来る途中そのような光景をみたのだ。うしろ風、北風が強くて、南へ下る船の煙が前に流れた。よほど変にみえたから印象にのこった。だから、書いた。このことは、私の帰島が冬であったことをあらわしている。父は、四月に死んだ。多分、その年に、工場がつぶれたのだ。そして、季節風の吹くころ、母は、私を連れて島へ戻った。どんなつもりだったろう。自分の両親に逢うためか。あるいは島に永住するためか。いずれにしろ、私といっしょに暮らすつもりであったことはまちがいないだろう。しかし、伯父には、私が、ひねくれた頑固な子供にみえたことだろう。私は、そのことを説明出来なかった自分を今になって残念に思う。

私は、こうして、島へ一度帰っている。ちいさな畑がある。粟や野菜をつくったり、ほかの農家の賃仕事をしたりして働けば、島で生活出来ないことはなかったはずである。けれども、母は、思い切った再婚をして、再度鹿児島市へ移行した。私を都会で教育したい気持ちがあったのだろう。母の再婚の相手は、船員であった。鹿児島市と沖永良部島を往復するコースを普通は大島航路という。大島は全国の地図にたくさんある。奄美航路のほうがわかりよいのであるが、大島航路である。この船の船員といっても、客室の世話をするボーイであった。

私を養育してくれることがその結婚の条件であったにちがいない。そして、船員の船に、家族として無賃乗船して、私たちは、またしても、鹿児島市へ行った。

その次の記憶は、だから、鹿児島市である。私は、これまでのどの住居ともちがう、ほかの家に住んでいた。長屋の一軒である。借家であったろう。カマドをおくから土間が広くて、あとは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c